



【特集】

# ひとりじゃない

「孤立・孤独死を出さない地域の見守り」をテーマに、豊里コミュニティ推進協議会が中心となって制作した映画「ひとりじゃない」。昨年4月から制作を開始した本作品は、12月に完成し本年1月に試写会で一般に披露されました。今回の特集では、豊里地域の取り組みから、孤立・孤独死を防ぐために必要なことを考えます。

## 高齢者の一人暮らしが急増

全国的に核家族化が進み、一人暮らしの高齢者が増加。社会から孤立した人が家の中で亡くなったまま、長期間発見されない「孤独死」といわれる現象が増加しています。本市では、都会のように隣にどんな人が住んでいるか分からないという人は少ないと思いますが、時代の流れとともに近所付き合いが減り、家族とも連絡を取らず、相談できる相手が誰もいないという人が増える恐れがあります。

厚生労働省の国立社会保障・人口問題研究所は、昨年1月に「日本の世帯数の将来推計(全国推計)」を公表。2040年には、世帯主が65歳以上の高齢者世帯が全世帯の44.2%を占め、そのうち40%が一人暮らしになると推計しています。

本市における15年の国勢調査の結果では、高齢者世帯は4299世帯で全世帯の16.4%。そのうち、半数以上の約54%が単身世帯となっています。10年の同調査結果と比較すると、高齢者世帯は726世帯増加。今後さらに高齢者の単身世帯が増加していくことが予測されます。また、若年層でも孤立・孤独死は増加傾向にあり、幅広い世代で起こり得る可能性があります。

## 豊里地域から広がる地域見守りプロジェクト

孤独死の問題点は、体調が急変しても助けが呼べず、すぐに気付いてもらえないこと。そして、残された遺族は悲しみと後悔の念を背負います。借家では、遺族に特殊清掃費用などの金銭的な負担を掛ける場合もあります。

豊里公民館を管理・運営している豊里コミュニティ推進協議会(佐々木信義会長)は、18年度「孤立・孤独死を出さない地域の見守りプロジェクト」を実施。孤独死防止を啓発する映画の制作に着手しました。話を聞き、趣旨に賛同した俳優の稲森誠さんや小林涼子さんが協力を快諾し出演。さとう宗幸さんも友情出演しました。監督・脚本・編集を務めた鐘江稔(かねえのり)さんをはじめ、プロの映画スタッフも撮影に参加。多くのマスコミで取り上げられ、注目を集めています。

## — あらすじ —

東日本大震災の津波で妻と子ども3人を亡くした男、赤井誠。被災地から離れた地に移り住んで独り暮らしを余儀なくされる。赤井は、亡くなった家族が忘れられず後追い自殺も考えながら、鬱々とした日々を過ごしていたが...